慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	地方修験の宗教民俗学的研究
Sub Title	
Author	由谷, 裕哉(Yoshitani, Hiroya)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1999
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.50 (1999.) ,p.57- 61
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告 : 学位授与者氏名及び論文題目 : 博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000050-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社会学博士（平成11年6月9日）

乙　第3287号　由谷　裕哉

地方修験の宗教民俗学的研究

〔論文審査担当者〕

主査　國學院大学文学部教授・
慶應義塾大学名誉教授
文学博士　宮家　準

副査　慶應義塾大学文学部教授・
大学院社会学研究科委員
文学博士　鈴木　正崇

副査　元駒澤大学文学部教授・
日本山岳修験学会副会長
文学博士　長野　覚

論文審査の要旨

本論文は修験道の中心地であった吉野・熊野・大峰などに対して，各地の修験道の宗教活動を地方修験と名付けて，宗教民俗学的に解明したものである。従来の修験道研究は，中央の修験の縁起や関係史料，教義書や峰中修行などに基づいて，研究が進展してきた。しかし，地方霊山に依拠した修験の活動の実態や世界観などは余り解明されず，郷土史の枠組みで信仰史が問題とされたり，近世以降に展開した登拝講や里に定着した里山伏に関する歴史研究はあるが，修験道の全国的研究とはほとんど接点がなかった。本論文は，こうした情勢に鑑み，主として古文献に依拠した伝承面から，地方修験，特に白山・立山・石動山を中心に研究して，中央と地方の修験道を総合的に結びつける新しい見解を提示している。全体の構成は以下のようである。

序　論
　第1章　対象としての地方修験
　第2章　方法としての宗教民俗学
本　論
　第1部　地方霊山開山以前の伝承
　　I　古代白山をめぐる宗教文化
　　第1章　白山の宗教文化：概観
　　第2章　古代の越前側白山の宗教文化
　　第3章　古代の加賀側白山の宗教文化と国家仏教
　　II　地獄説話と古代立山の宗教文化
　　第1章　立山の宗教文化と地獄説話：概観
　　第2章　『法華験記』における立山地獄説話と開山伝承
　　第3章　『今昔物語集』巻十七における立山地獄説話とその中世的展開
　　第1部の小結
　第2部　地方修験の展開
　　I　白山修験
　　第1章　中世前半における加賀側中宮の修験
　　第2章　中世後半における加賀側の修験
　　第3章　近世における美濃・越前側の修験系芸能
　　II　石動修験
　　第1章　石動山の宗教文化：概観
　　第2章　石動修験の開山伝承
　　第3章　中世における石動修験の活動
　　第4章　近世における石動修験
　　第2部の小結
　第3部　地方修験と地域社会
　　第1章　近世の白山加賀側の宗教環境と排仏運動
　　第2章　近世石動山と地域社会：築山祭祀を例として
　　第3章　岩手県宮古市域における里山伏
　　第3部の小結
総　括

序論では方法論の提示を行なう。第1章では，地方修験を，①中央における修験教団が組織化される以前の古代律令的一山人的な山林修行者が地方霊山に依拠している形態，②地方霊山においていわゆる一山組織が形成された時代のその組織を構成する修験，③近世以降幕府の施策などによって里に定着した修験が地域社会と関わるようになった局面，という三つの存在形態において対象として捉えることを提唱している。この分類を踏まえて，以下の第1部から第3部で地方修験を三局面に分けて論ずる。一方，第2章では，その分析のために以下の本論で用いる宗教民俗学的アプローチを位置付ける。主に歴史研究の観点からの取り組みへの反省を踏まえ，本論文では地方修験に関する語りの構造を持つテクスト（縁起・儀礼など）に対象を限定し，テクスト全体またはコンテクスト（文脈）に立ち返って意味の解明を目指している。

本論は三部構成で，序論の第1章で地方修験の存在形態を三局面に分けたことに合わせている。第1部は，地方霊山が開山する以前の律令国家時代に，地方の山岳に

依拠した山林修行者について考察し，Ⅰで白山，Ⅱで立山に関する事例を扱っている。

白山についての第1章では，その歴史を三方の登拝口（加賀・越前・美濃）の宗教施設を通じて概観した上で，従来の研究を，①郷土史-地域史からの白山信仰史，②白山修験が担った芸能の仏教民俗学的考察，③地方寺社としての白山への権門-顕密体制論からの歴史学的接近，に整理して評価を付している。ここでは衆徒や修験の観点からのボトムアップな視点の確立や，白山修験を地方的事例でなく，修験道研究一般の中に位置付けることを提唱している。

第2章では古代の越前側の白山を開山者の縁起書『泰澄和尚伝』から考察し，一部は10世紀頃に成立し，全体的には12～14世紀に下る可能性を確認した上で，形態論的に分析している。その結果，開山伝承の中に，密教-修験道的な要素と，開山以前と推測される山麓でのシャーマニックな修行形態という二種の伝承構造の重なりがあることを抽出する。前者はテクスト生成時（14世紀）の付加部分の可能性があるが，後者は開山以前に関わり，〈1〉シャーマニック・イニシエーションを示唆する部分があること，〈2〉泰澄の師匠には虚空蔵求聞持法の影響があること，〈3〉臥・浄定という泰澄の二侍者に関する叙述は泰澄のシャーマンとしての験力を示すこと，を指摘している。

第3章では古代の加賀側の白山と国家仏教を検討する。古代の加賀国分寺と中宮八院（8世紀頃）との親密な関係を，源平盛衰記・金沢文庫文書・『白山記』・仏教遺跡の考古学的報告などから明らかにしている。特に，安元年間(1175～77)の騒動（中宮八院の一つが領主に抵抗して焼かれ，白山衆徒が比叡山に神輿振りをして抗議）は，こうした関係の持続の例証となるという。中宮八院は，加賀国分寺かまたはそれと同等の律令国家時代の仏教施設の後背地に，白山の伏拝み所として形成され，加賀側の拠点となった可能性を示す。そこに依拠した衆徒たちは，律令国家を否定する権力（院など）と結び付く契機を持たず，地方修験に留る背景があったと考察している。

立山についての第1章では，地獄観の検討のために『日本霊異記』の形態論的分析を行なう。そこから地獄観念の多くが中国産であるが，蘇生譚より地獄堕ちの恐怖を語り，戒律を守ることの必要性を主題にした話が多く，ある程度は土着の他界観念を踏まえ，終末論的な色彩は濃厚でない，などの特徴を導いている。天台宗や浄土教が成立して以降の『法華験記』や『今昔物語』では，主人公が生前崇敬していた仏菩薩による救済が主題となるのに対して，戒律の強調はそれ以前の古型を伝えると見る。地獄説話は立山南側の天台系勢力の下で展開したことを確認した上で，地獄説話に先行すると推定されてきた開山伝承は中世に形成されたと見るべきだとする。これは根拠地であった芦峅・岩峅両寺の一山組織が整えられ登拝者があった時代に対応する。但し，立山修験の実態は近世しか明らかにならず，中世史料は極めて乏しい。芦峅寺最大の年中行事であった布橋灌頂も近世に整序されたと見られる。一方，伝承形成の背景をなす近世の立山禅定は，廻峰の伝承や修験の史料から，世俗の登拝者が主体だったと考えている。

第2章では立山の地獄と女人救済に関する『法華験記』第百廿四話（11世紀前半）を問題とする。これは観音による堕地獄の女の救済譚で，十巻本『伊呂波字類抄』などに載る中世の開山伝承より早い成立と見て，中世以降に一般的となる地蔵による救済譚である『今昔物語集』第十七の第二十七と比較している。その結果，山内の地獄の生々しい描写や，語り手の僧が立山に籠もらず詣で型の修行をしていたことから，『法華験記』所収の説話を，権門寺院の配下に組み込まれる以前の諸相を表出しているとしている。

第3章では『今昔物語集』所収の説話を扱っている。地獄説話のうち巻十七所収分は，中世以降にも類話が継承され立山とも関係深いという。この巻の編集意図や院政期の社会背景などを検討し，地蔵関係部分は所定の編集方針に貫かれ，第二十七話は女性に関する教団の布教を含意した説話群（第二十七～二十九）に含まれることを確認している。『今昔物語集』の成立は11世紀半ばから12世紀初頭であるが，地蔵救済譚は開山以前の形態を示すと見られる。しかし，中世には立山が阿弥陀を本地とし熊野修験との関係を強めていくので，『今昔物語集』は『法華験記』よりは過渡的な性格を持つと位置付けている。

第1部の小結では，白山・立山に関わる開山以前の伝承の検討を踏まえて，より一般化し，これと関連する本地感得譚の成立について，中央の修験道教団との比較を行なっている。最初に中央部での神仏習合について検討する。高野山と比叡山では，9世紀から10世紀前半に護法善神の信仰があり，これは各山の地主神ではなく，最澄や円仁の山林修行の伝承の中で，守護神として招来されたという伝承を伴なう。一方，吉野や熊野の神は延喜式の神と近く，この点では白山や立山における延喜式に出る神格と近い。一方，吉野・熊野で本地説が登場した

経緯は，高野山や比叡山の護法善神の伝承に類似する。各山の本地仏の成立は，行者が修行の末に感得する，或いは狩人など山中生活者が偶然に感得する，という伝承を伴なうという。その時期は院政前期で，初出文献は吉野金峰山は『今昔物語』，熊野は大江匡房の『江談抄』で，吉野や熊野と院権力との結び付きが推定される。これに対して，白山や立山の山林修行者の伝承では，律令権力や権門寺院との関連のみが見られ，その結果が中世以降彼らが地方修験にならざるを得なかった理由と考えている。

第2部では地方霊山が開山した後に，独自の組織を形成した地方修験の伝承を考察の対象とした。Iでは越前・加賀・美濃という三方の登拝口を擁し一山組織が形成された時期の白山の修験を問題とし，IIでは能登の石動山に依拠した修験を扱っている。

白山についてでは，第1章では中世前半における加賀側の修験を，中宮寺で成立した『白山記』を素材として分析している。原本は12世紀中頃に成立し，以後15世紀前半まで付加部分がある，と推測した。縁起の元の形態に近い部分は，〈1〉幾つかの山内伝承が編集された形と考えられる，〈2〉全体的に顕教的な性格が濃厚に見られる，〈3〉王子—御子神が多く書き上げられている，などの特徴を指摘している。〈2〉は中宮関係の山腹に夏のみ籠る夏衆が，山頂付近の泉に法華経写経の硯の水を汲みに登拝する修行が重視された結果ではないか，と推定している。〈3〉は白山中宮が11～12世紀頃に比叡山末となり天台が主体となる以前に，荒々しい密教的な行者が山の荒魂を自らの験力で調伏して王子神として，里に下ろした形を起源とするのではないか，と考察している。

第2章では中世後半における加賀側の修験を『白山禅頂私記』（16世紀初頭頃成立）を通じて分析している。この文書には『泰澄和尚伝』と『白山大鏡』（喪失した『大鏡巻』を受け継ぐ）の影響があるが，相対的に自律性を有しているという。これは修験の情報源としては不足するが，天台宗的な立場と浄土思想を主体としながら泰澄伝その他の白山に関する諸伝承を取込み，多義的性格を持つと位置付けている。

第3章では，近世における修験系芸能，美濃郡上郡の長滝延年，同本巣郡の能郷猿楽，越前今立郡の水海田楽を近世に遡及して，相互関係や意味を探る。長滝延年は，近世初頭では修正会や延年的な構成が完備し，当時から田遊び的な芸能を受容し，次第に後者の比重が増加したことなどを指摘している。水海は演目に延年の開口のような中世に遡る要素を含むが，能・狂言の演目を数多く受容して現在に近い形になったのは文化年間前後であると考えている。能郷は能・狂言を積極的に受け入れ内容を変えたと思われるのに対し，水海の方はあまり変わっていないという。結論として，白山修験が関与した長滝延年は中世後半頃までしか遡れず近世以降の要素が多く付加されているが，水海田楽は中世芸能を今も残し美濃や越前の白山一山衆徒の芸能の在り方をよく示すと結論付けている。

石動修験についてでは第1章では，起源は古代末頃に遡る可能性があるものの，中世史料が乏しく開山以前の姿の推測は困難だと指摘している。近世には衆徒が山頂付近で生活を営む形態となり，その伽藍構成もやや小規模だったと推定する。氷見側からの登拝道は近世に整えられた観光的な性格を持ち，口能登側からの登拝道は中世に遡る行者的な登拝の名残りを一部に残し，特に多根口は，国分寺の所在地だった七尾と石動山を繋ぐ道として，山の宗教的地位を決定づけたと指摘している。

第2章では，『石動山古縁起』の文脈に即した分析を中心に開山伝承を探求した。内容は四つの時代に分かれ，二番目の方道仙人の伝承は後世に付加された可能性もあること，本来の開山伝承は三番目の智徳とその弟子智伝に関する伝承で，その中心が虚空蔵求聞持法の霊験の主張であること，などを明らかにしている。また，縁起内の各伝承のおよその成立年代を比較検討し，この縁起の成立を中世の14世紀半ばから後半と推定している。一方，近世には石動山の固有の祭神は五社権現とされ，近世初頭には『石動山新縁起』が作成されるが，この動きは，ともに白山修験が石動山に勢力を伸ばした結果と見ている。しかし，既に『石動山古縁起』に白山修験の影響がうかがえるので，中世の真言系修験が，後世に白山の支配下に入ったとする単純な展開は出来ないと考えている。

第3章では中世の石動修験に関する史料の検討を行ない，口能登を中心とする民俗資料や近世の伝承の考察を併せ行なっている。古文書から京都の勧修寺と本末関係にあったという見解を再検討し，地元の抵抗の記載から山内衆徒が高野山または仁和寺と関係が深かった可能性を指摘している。また，近世の地誌や伝承で石動山と関係がある宗教施設や遺跡に注目し，虚空蔵祭祀，白山修験の影響，気多神社の祭神である出雲系神格との関わり，能登守護畠山家との関連，という四要素を導出している。気多神社や畠山家との関係から，中世後半の活動も明らかになるかもしれないと示唆する。

第4章では，近世の『貞享縁起』を対象に，その宗教

的意味や社会史的背景を考察している。この縁起は，泰澄を石動山の開山とし，部分的に『石動山古縁起』や気多神社の『古縁起』を，換骨奪胎した内容となっている。その成立の背景に1660～70年代における石動山の聖俗両面での一時的な衰退，石動衆徒が真言宗四門跡寺院へ接近していたことを指摘し，それが同縁起に反映しているとする。

第2部の小結では，白山と石動山の修験の事例を考察する意義を一般化して，白山修験の加賀側を中心とする組織の研究と石動修験と仏教教団（曹洞宗）との関係という二つの主題に分けて検討している。第一の主題は，近世史料からの組織の考察で，中核をなす荘厳講の講衆は院坊を有する衆徒で一山の上層部を構成する学侶身分を含むこと，加賀白山寺・本宮の組織は世襲の衆徒を中心に，最上部の清僧が比叡山に，衆徒の下には各院坊に家族や弟子，さらに低い身分の神人がいた。組織の在り方は，中世文書の『白山記』や『白山禅頂私記』に天台宗教義や顕教的性格の著しいこと，入峰の記述が乏しいことと対応し，本地垂迹の記述が乏しいことも本宮の組織が衆徒主体であったためかとしている。また，荘厳講と延年芸能との関連付けは疑義が残るという。

第二の主題は，道元と並んで曹洞宗の両祖師の一とされ能登で活躍した瑩山(1268～1325)の門流と，石動山や白山の信仰との関連の考察である。これに合わせて白山信仰を被差別民やケガレ観と結びつける民俗学上の仮説も検討している。曹洞禅は瑩山自身の白山への信仰や石動山信仰を含む既存の庶民信仰と巧みに妥協し，洞門内で鎮守白山という意味付けが登場し，石動山も白山系の信仰を取り込むようになったという。史料の希少な石動山周辺の地方史的記述より，石動修験における籠りや瞑想行的な側面と曹洞禅とのつながりを重視すべきではないか，としている。このことは白山をめぐる宗教文化にも通底し，観音信仰が日本における宗教的な伝統としての籠りと深く結び付いていると示唆する。

第3部では地方修験と地域社会の関係を述べ，近世以降に幕府の政策などによって里に定着した修験の活動を扱っている。事例は白山・石動山の他，岩手県宮古市の里山伏を対象としている。第1章では明治初期に厳しい廃仏運動を展開して後に郷土史の草分けとなった森田平次の著作を，モダニズムとファンダメンタリズムの融合と見た上で，地域社会との対応を検討している。その著作の素材となった『白山記』の解釈と実態の批判を通じて，かえって近世の加賀側が神仏習合を維持していたことがわかるという。

第2章は高岡市の二上射水神社の築山祭祀を通じて，石動修験と地域社会との関連を探っている。式次第と執行者の変遷や意味付けの変化を中心とした考察である。その結果，祭礼の中世的形態が日吉神社東本宮の神事の影響を受け，王子神の再生が意図され，近世には修験の験力を里人に誇示する祭場であったことを明らかにしている。その後は神道化して水を統御する神となる。築山祭祀は石動の梅宮祭にも通底する様相を持つという。

第3章は岩手県宮古市里山伏に関する調査からその動態を探っている。当地への修験的な宗教者の来住の前提となった宗派仏教，特に，曹洞宗に注目し，その俗信や密教的なものの包摂，近世以降の組織の変化，民間念仏の隆盛などと里山伏の関連を考察している。また，近世における里山伏の活動と民間念仏や民間宗教者の活動を通じて，里山伏の在村活動や世代継承の実態，年行事との関係や補任などの教団内での動態の分析を行なう。この結果，祈禱を通じて里山伏が地域社会の要請に応える一方で，教団側からの制約を受け，藩内での本山派と羽黒派の確執に巻き込まれていた実態が浮き彫りにしている。

第3部の小結では，事例研究を一般化して民俗宗教と社会変化の枠組みで整理した。築山祭祀では，明治以後の国民国家成立に伴う伝統の発明，つまり前近代的要素が払拭されずに，常に時代毎にハイブリッドに混ざりあっていく様相を考察すべきだとしている。里山伏の実態からは，伝承としての同族制村落，隠し念仏，行者による祈禱という民俗宗教の三つの要素が，残存しつつも換骨奪胎されて新しい意味付与がなされていく過程を明らかにする。地域社会における地方修験を民俗宗教の観点から見るには，ハイブリッド性と残存としての民俗事象の評価の重視が大切であると考えている。

最後に総括では，以上の本論での考察を踏まえ，各事例分析の成果を概観し，本論文での考察の成果と今後の課題を提示している。その主要な論点は，本論文で事例とした地方修験の中央の修験教団に対する相対的自律性と，修験と諸宗教（曹洞宗，浄土真宗）との交流にあり，この点に関して今後さらに研究を展開する余地が残されているという。

以上のように，本論文は地方修験という研究が比較的未開拓な領域の解明というだけでなく，白山・立山・石動山という個々の地方修験と修験道の全国的展開との関連性，更には地域社会の宗教文化への影響における位置付けなど，幅広い宗教民俗や修験道の研究を展開している。本論文は，以下の点で高く評価できる。第一には文

献史料と民俗調査を組合せ，多くの論文を渉猟した上で，各地の伝承に対して明確な方法論による鋭い分析がなされ，従来にない考察が多数提示されたことである。第二には地方修験という視角によって，白山信仰を中核に立山や石動山など北陸地方の修験と，吉野・熊野を主体とする中央部の修験とが極めて効果的に対比されて，相互の特色と関係性，地域の独自性や歴史的展開の差が浮かび上がったことが挙げられる。第三には地方修験の存在形態を序論で三点に集約して明示したことにより，全国各地の地方霊山についての従来の調査や研究を再検討して統一的に検討する方法論的根拠が与えられたことである。複雑で個性のある地域をこれほどまでに一貫性を以って解明した論文はこれまでになかった。本論文は基本的には宗教民俗学的研究であるが，社会学・人類学・芸能史・国文学・歴史学・地理学など学際的研究に大きく寄与し，日本の宗教文化の解明に大きな貢献をしたと考えられる。

本論文は各所で述べたように独創性が極めて高いが，それゆえに今後の緻密な論証や史料の読み込みを待って解明できると思われる点も多々見受けられる。歴史学との本格的な接合は今後の課題であるし，民俗学の講集団研究などとの関連はあえて触れられなかったが，地域社会との関わりで言えば，やはり組み込む必要性があったと思われる。更に，大きな課題は既成の仏教教団との関連である。例えば，白山や石動山の修験と曹洞宗の関連については，詳細に考察が加えられているが，筆者自身も述べているようにまだ不十分である。また，北陸地方の信仰を検討するには広い地域にわたって強い信仰を民衆に浸透させた浄土真宗教団と修験道の関連が明確になっていない。真宗はいわゆる毛坊主に基礎を置いており，半僧半俗の修験と極めて近い性格を持つ。また，高野聖や不受不施派は念仏を中核として民衆の中に入り込み，大黒札や六字称明札を配札したし，善光寺聖など真言念仏との交渉もあった。こうした地域の民衆の歴史と既成の仏教教団との交流など知識の質の異なる人々との交渉過程が多元的に描かれれば，更に論文に重厚さが増したであろう。また，地方修験の解明にあたって，宗教的空間認知の解明が試みられて，かなりの成果が挙げられているが，地図の作図に際して縮尺の記載がないためにやや正確さにかける点があることは難点と言えるかもしれない。但し，これは瑕瑾に過ぎず論文全体の大きな流れにはさほどの影響はない。以上のように，幾つかの今後の課題は残されているものの本論文の学界への大きな寄与は疑う余地はない。

上記の審査の結果により，筆者は本論文によって博士（社会学）の学位を受けるに値するものと認められる。

社会学博士（平成11年7月14日）

乙　第3293号　坂本　邦彦

東アフリカ農耕民社会に関する社会人類学的研究
——独立後の社会変化と農耕民の対応——

〔論文審査担当者〕

主査　國學院大学文学部教授・
　　慶應義塾大学名誉教授
　　文学博士　　宮家　準
副査　敬愛大学国際学部教授・
　　慶應義塾大学名誉教授
　　法学博士　　小田　英郎
副査　名古屋大学大学院文学研究科教授
　　社会学博士　　和崎　春日
副査　慶應義塾大学文学部教授・
　　大学院社会学研究科委員
　　文学博士　　鈴木　正崇

論文審査の要旨

本論文は，ケニアのタイタ Taita とタンザニアのパレ Pare という二つの山地農耕民社会や文化の動態を，1979年以来の長期にわたるフィールドワークで収集した膨大な一次資料に基づいて，社会人類学的視点から研究したものである。東アフリカの農耕民社会は，ヨーロッパ社会との遭遇以後，西欧列強による長い植民地支配の時代，1960年代を中心とする独立期，国民国家の形成期という大きな変化の時代を経てきた。本論文は，アフリカの文化的枠組みとは異なる国民国家の枠組みを受け入れた第3期に焦点をあてて，農耕民が国家形成期において生態的・社会的・文化的危機に直面した時に，様々な対応方法を模索してきた過程を検討して，東アフリカ農耕民社会の可塑性を描き出している。更に，その可塑性が社会のどの部分に顕著であり如何なる特性を持つかを分析し，農耕民が選択する生き方は，伝統性の喪失ではなく，社会構造全体に組み込まれた再生産のメカニズムによって新たな状況を生成していくことであるとする。一方，大きな視野にたって本論文を評価すれば，従来の部族や民族を単位とするアフリカ研究に対して，